

# 博士學位論文

## 内容の要旨および審査結果の要旨

氏名・（本籍地）	佐藤 亜聖（奈良県）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	乙第9号
学位授与の日付	平成27年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学位論文名	中世都市奈良の考古学的研究
論文審査委員	主査 奈良大学 教授 坂井 秀 弥 副査 奈良大学 教授 千田 嘉 博 副査 奈良大学 教授 河内 将 芳

### 【論文内容の要旨】

序論 日本中世都市研究の現状と奈良

第I部 古代都市から中世都市への転換とその背景

第1章 中世都市奈良研究の軌跡と射程

第2章 奈良における土師器皿の編年—研究の前提

第3章 古代都市平城京における外京の位置付けとその実態

第4章 長岡京遷都後の平城京と中世都市への萌芽

第5章 中世都市奈良の成立

第6章 治承兵火の奈良

第II部 中世都市奈良の諸相

第1章 都市空間の変化と機能分化

第2章 鎌倉時代末の奈良における産業再編

第3章 考古学からみた中世都市奈良における葬送空間の変遷

第4章 日本中世都市における葬送地と奈良の特質

第5章 元興寺旧境内主要伽藍域の変遷と中世都市奈良の終焉

第III部 周辺から見た都市奈良の座標

第1章 惣墓の形成と村落の墓制

第2章 農村寺院における寺辺整備

### 第3章 大和における中小寺院の動向

### 第4章 周辺から見た都市奈良の座標

## 終論 日本中世都市における奈良

本論文は、冒頭の序論に続く本論と終論からなる。本論は大きく三部からなり、第Ⅰ部は古代都市平城京から中世都市奈良への変遷過程を追い、第Ⅱ部は中世都市の内部構造について多角的に検討を行い、第Ⅲ部は周辺の村落・墓地・寺院の分析から奈良の位置づけを考察するものである。

序章では、これまでの中世都市についての研究史を文献史学と考古学から概観し、本論文の目的について、発掘調査資料を網羅的に集成し、これに立脚して都市空間の変遷、その実態について通史的、俯瞰的理解を試み、中世都市奈良の成立から近世都市奈良町までの展開を分析することとしている。

第Ⅰ部においては、奈良に関する研究史を踏まえた本論文の目的を整理し（第1章）、まず考古学研究において重要な時期決定の基準資料として、土師器皿をとりあげて詳細に検討して、実年代の比定を行う（第2章）。こうした年代根拠を前提にして、古代の平城京城と中世都市奈良町周辺における発掘調査事例を網羅して、それぞれの地点の遺構の有無・時期・種別などを集成したデータから、遺跡の動態を把握する。

まず、中世都市奈良の母体となった古代都市平城京の外京城の実態について、条坊制のありかたと空間利用形態の分析を通じて明らかにし（第3章）、中世都市奈良の成立を旧平城京城から都市域が離脱するという指標により、遺構分布と都城の跡地利用の観点から検討する（第4章）。さらに、中世都市の成立について、主に遺構分布と町割りの成立から論じ、同時に、奈良に残された平城京時代の都市規格についても検討を行い、中世都市成立過程について言及する（第5章）。また、従来、中世的地縁単位である郷の発生に重要な役割を果たしたと考えられてきた、治承4年の平家による南都焼き討ちについて検証を行い、それがこれまで想定されてきたほど大規模なものではなく、これがそのまま都市発展の契機につながらなかったことをあきらかにする。

第Ⅱ部は中世都市の内部構造について多角的に検討を行うものであるが、まず、13世紀における都市空間の変化を、主に都市装置の確立という視点から検討し、さらに都市産業について、都市内部における手工業生産の痕跡を集成・整理することにより、当該期の都市整備について検討し（第1章）、13世紀代、とくにその後半に大きな画期があることを指摘する。これを受けて、13世紀後半から14世紀の産業再編について、主に瓦質土器の輪花形火鉢から検討する（第2章）。続いて葬送をとりあげ、墓地形態および葬送墓制にともなう念仏講などの都市共同体のあり方を検討し（第3章）、これを受けて、日本を代表する中世都市である博多、京都、平泉、そして鎌倉における墓地形態と比較し、奈良の特性を抽出する（第4章）。最後に中世都市奈良の終焉を、主に元興寺旧境内が町屋化する過程を通じて分析する（第5章）。

第Ⅲ部は、周辺の村落・墓地・寺院の分析から奈良の位置づけを考察するものであるが、まず農村における墓地形成過程を分析し、農村における葬送共同体について、惣墓の形成と領主権力との関係を検討する（第1章）。13世紀における興福寺・東大寺寺辺整備と対比させるため、農村寺院化した西大寺周辺を取り上げて、農村寺院整備の実情を分析する（第2章）とともに、中世都市奈良と密接な関係を持つ盆地各地の中小規模寺院の動向について、基礎資料の集成を行い分析し（第3章）、ここでのまとめとして、周辺地域の動向を整理し、中世都市奈良と相対化させる（第4章）。

以上のような分析を経て、終章では日本中世都市研究における奈良の位置づけを行う。

## 【審査内容の要旨】

本論文は、佐藤氏が調査研究を継続してきた中世都市奈良の成立と展開について正面から論じたものである。その基礎的内容は多くの旧稿によるが、本論文の作成にあたってテーマに即して全面的に改訂し首尾一貫した内容の論文としている。

この論文では、対象となる考古資料を悉皆的に集成しているが、発掘調査の多くは学術的な課題に即して計画的に行われるものではなく、開発事業に伴って発掘調査の主体や地点・規模がじつに多様なものであり、資料として使いづらい面がある。本論文が対象とする中世都市奈良の範囲である古代の平城京外京についても同様であり、これまで長年にわたり数多くの調査が積み重ねられてきている。そのため、本論文においては、古代から中世への実態を考古学的に検証するために、その前提作業として、8世紀から17世紀までの総計約1100地点にのぼる膨大な調査成果について集成している。こうした基礎的な資料集成とそれに基づいた精緻な分析は、これまでなされてこなかったことであり、この点においてまず高く評価される。

集成した膨大な資料については、それぞれの具体的な時期を決定する考古資料として、普遍的に存在する土師器皿を取りあげて、従来の研究を踏まえながら、あらためて体系的に編年研究を行っている。このこと自体きわめて重要な考古学の研究成果といえるが、一貫した編年軸をもとに資料の分析が行われた点も、基礎的な成果として特筆できるものといえよう。また、発掘資料のほかに中世石造物や文献史料について、積極的に活用していることも重要である。

こうした作業を通じて、これまで蓄積された膨大な遺構の時期を認定して、その盛衰・消長に着目し、中世都市奈良の成立について、10世紀前半、11世紀後半、13世紀後半に画期があることを明らかにする。10世紀前半の画期は中世へと直接つながらないが、11世紀後半は以後、継続して遺構が営まれ、後につながる町割の成立をみる。また、13世紀後半は、都市領域や都市施設が完備し現代まで継続する大きな画期とする。こうした画期の設定とその内容は、考古資料に立脚した実際の土地利用のあり方に基づくものであり、きわめて説得力がある。従来、文献史料により都市再編において大きな画期とされる12世紀後半の治承兵火について発掘資料から検証し、それほど大規模な火災ではなく、その見直しを迫っていることは重要な指摘である。

一方の中世都市から近世都市への転換については、行政的な条件の制約から発掘調査資料がきわめて少ないなか、元興寺境内地の発掘調査成果に着目して、境内地内に新たな遺構が成立する画期として、16世紀後半と16世紀末から17世紀初頭の二つの時期に注目する。ここで、第一の画期に境内地内に町屋が進出し、第2の画期には伽藍の礎石が撤去され金属生産が始まるように寺院境内の規制が完全に失われていることをあきらかにする。この近世都市への転換にいついても、従来は1451年の宝徳の土一揆に主要堂塔が焼失して、町屋が進出したとされてきたことについて、修正をせまるものである。

中世都市のあり方については、単に遺構の消長や地割の成立といった問題だけではなく、中世奈良における重要な手工業生産品である瓦質土器輪花形火鉢の生産と流通の実態や、葬送の場のあり方などからも言及している。また、都市のほかに農村における墓制や城館との関連について注目し、周辺地域から都市の実態を浮き彫りにしていることも興味深い観点である。

こうした成果の一方で、冒頭で取り上げられている中世都市に関する研究史においては、文献史学や建築史などの成果や、最近の考古学からの研究成果に対する評価が、やや一面的でありかならずしも十分ではないこと、また、本論文における考古学の立場からの独自の中世都市像についても十分に論究されていないことは惜まれる。

このような課題があるものの、本論文は中世都市奈良の成立と展開、近世都市への変遷について、膨大な考古資料に立脚して本格的かつ体系的に論じたはじめての研究成果ともいえ、今後の中世都市研究における果たす役割は大きいと確信する。

## **【最終試験の結果】**

佐藤亜聖の博士学位請求にかかる最終試験については、審査委員会の主査坂井秀弥、副査の千田嘉博・河内将芳の計3名があたった。各審査委員は学位請求論文を熟読・検討した上で、平成27年1月7日、奈良大学総合研究所において博士論文審査公聴会を実施した。公聴会においては、院生・学生13名の参加のもと申請者による論文要旨の発表に続いて、各審査委員と申請者により質疑応答がなされた。さらにそれに続いて口述試問を実施した。その結果、佐藤亜聖が博士の学位を取得するにたる学識を有することを確認した。

## **【審査結果】**

学位請求論文「中世都市奈良の考古学的研究」の審査の結果から、佐藤亜聖に博士（文学）の学位を与えることが適当と判断される。

以 上